

平成26（2014）年度
熊本大学大学院法曹養成研究科

第4期募集（小論文試験問題）

試験時間 120分

頁・・・ 1～4

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 試験開始後ただちに、問題用紙（この表紙を含めて4枚）、解答用紙（5枚）、下書き用紙（5枚）が、揃っていることを確認してください。
3. 解答用紙のすべて（5枚）に受験番号を記入してください。なお、氏名は記入しないでください。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入してください。解答用紙のホッチキスは、外さないでください。
5. 問題の内容に関する質問には応じません。
6. 配付された解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
7. 試験終了後、問題用紙および下書き用紙は持ち帰ってください。

【課題文】を読み、以下の設問に答えなさい。なお、いずれの問題も法的知識を問うものではありません。

問題1 課題文にふさわしい見出しを、課題文の用語や文章の一部を用いて、Ⅰ・Ⅲは6字以上10字以内で、Ⅱは15字程度で言い表しなさい。

問題2 著者は、「東日本大震災を機にあらわになった専門家のありよう」にはどのような問題点があり、それをどのように見直すべきであると考えているか。「原子力の安全神話」との関わりをも踏まえて、著者の主張をまとめなさい。そのうえで、著者の主張についてのあなたの意見を交え、500字以上800字以内で述べなさい。

問題3 著者は、「(社会の)役に立つ科学という発想」について、「本来のサイエンスのありよう」と異なりいかなるものであり、どのように考えているか。「原子力の安全神話」との関わりをも踏まえて、著者の主張をまとめなさい。そのうえで、著者の主張についてのあなたの意見を交え、400字以上700字以内で述べなさい。

【課題文】

I

基礎研究を行なっている者の役割として、世界観の問い直しというかなり大きなテーマを考えようとしているのですが、ここで大思想を打ち上げようというわけではありません。ただ私は、近代社会の特徴を「科学技術社会」と捉え、科学技術のありようを問う時、そこで最も大事なものは、科学者・科学技術者のあり方だと思っています。もう少し広く言えば「専門家」のあり方です。

福島での原発事故後、専門家の対応に多くの人が疑問を抱きました。いったい何が起きているのか、これから何が起きようとしているのか。不安と疑問を抱いてテレビを見つめている人々を、納得させるような説明がなされなかったからです。その後、原子力を推進してきた専門家が特殊な集団を作り、狭い視野の価値観で動いていることが多くの人を知るところとなりました。そして、科学者、科学技術者、もう少し広く言うなら専門家の考え方や行動が一般社会からかけ離れていることが指摘されました。そこで、専門家の言うことは信じないという気分が生まれてしまったのです。

重要なことは、不信の大きな原因が、専門家が説明に際して用いた「用語」が難しすぎたとか、開示された情報が少なかったとか、そうした問題だけではなかったということです。「専門家」たちが、自らもまた社会の中に生きる一人の「生活者」であるという感覚を失い、閉じられた集団の価値観だけを指針に行動しているのだという事実が一連の説明を通じて伝わってしまったことが、最大の問題だったと思います。

II

原子力の分野だけではなく、科学や科学技術一般にまつわる問題として、専門家が説明しても一般の人にはわからない、と言われることがしばしばです。たしかに現在、科学のそれぞれの専門分野は細分化され深化しているので、同じ科学者であっても、少しでも異なる分野の内容の理解は難しくなっています。しかもそこで使われる専門用語はなじみのない人には意味がわかりません。というより、専門用語を聞かされただけで、とても難しくてわからないと思いこんでしまいます。そこでたじろぎ、そこから先は会話不能になるというわけです。

もはや専門家が非専門家と語り合うのは不可能となったとされ、それを解決しようとして、現在多くの人が、この間をつなぐコミュニケーターが必要だと指摘し始めました。専門家は専門家として自らの分野に閉じこもっているという姿はそのままに、専門の内容を社会に向けて翻訳するプロを作ればよい、というわけです。

このやり方に私は疑問を持っています。「専門家」というもののあり方、それに対する社会の受けとめ方はそのままに、コミュニケーターという別の専門家を設けたところで、またその専門家のことを理解させるためのコミュニケーターが必要になりかねません。この動きは基本的に間違っていると思います。

たんに社会へ向けた説明の努力ということ言えば、実は原子力の分野は、むしろ他の研究分野に比べて潤沢な資金と人材を広報のために投入してきました。広報を専門とする人もいます。しかし、社会に向けて伝える内容が、自らのありようを正当化するものでしかないならば、何の意味もありません。

巨額の資金が必要な原子力発電の場合、その開発・運用を国策とし、その中で企業も研究者も利権を得、それによって結ばれた集団ができているのだと言われます。閉鎖的な集団の中で独特の論理と意識がはたらいており、本来科学や科学技術には不可欠の自由な論議がなされていないという状況を揶揄して、「原子カムラ」などとも呼ばれています。

この「原子カムラ」が何より社会にアピールしようとしたのは、原子力の安全性でした。そのため、技術には存在するはずのない「安全神話」なるものが作られました。

どんなジャンルであれ、科学技術の専門家は、技術に絶対安全なものなどないことは百も承知です。それなのに、政治や経済からの要請しだいで「安全と言わなければならない」状況を作ってしまったために、安全神話という、科学の本来の姿からはほど遠い言葉が作り上げられ、その意味をあまり深く考えないままに使われてきてしまったのです。

ここでコミュニケーターという役割を作っても、現在の科学と科学者のありようをそのままにしておくなら、これまでの広報の拡大になるにすぎません。くどいようですが、科学と科学者が変わることが大事なのです。

III

原子力の「安全神話」が生まれた背景には、科学・科学技術と、政治的・経済的な「利

益」との強力な結びつきがあります。「役に立つ科学」という発想です。原子力の場合、国策の中でかなり特殊な人間関係が培われたと言わざるを得ませんが、実は現在の日本の科学技術社会のいずこにも大なり小なりこのような体質があることは否めません。

私が関わっている生命に関する科学でも昨今それが見られます。本来、生物学研究は「小型」なものでした。ショウジョウバエやマウスを用いての遺伝子研究、イモリやカエルなどでの発生生物学など、一つの研究を進めるグループは小さく、予算も少額でした。ところが、DNA研究が進んで生命科学となり、医学と結びついてアメリカで生物医学なるものが急速に進展し始めた1980年頃から、この分野の大型化が始まりました。とくに1990年以降、ゲノム・プロジェクトと呼ばれるプロジェクト型の研究が始まってからは、大型化そのものが目的と思えるような研究さえ出てきました。

しかもそれは、先端医療を生み人々の役に立つだけでなく、産業として経済発展を支えるはずだという目論見の下、国策に入れられました。科学技術立国を支える柱の一つとして重視され、予算はどんどん大型になったのです。こうなった途端、本来のサイエンスのありようとは程遠いある種のムラ意識が生まれたことは否めません。

ここでキーワードとなったのが、「役に立つ」という言葉でした。「社会の役に立つ」という言葉が重要になり、それが威力を発揮するのです。そしてこの言葉は主に、本当に人々のためになるかどうかではなく、経済的な利益につながるかどうかを意味していました。そしてそこからさらに進み、実際に経済的な利益につながるか否かよりも、「つながるかの如く見せる」ことが大事になってきます。研究の多くが税金や企業の資金で進められている以上、さらに研究を続けていくためには、役に立つことを知らせて予算獲得につなげなければならないからです。自分たちの「ムラ」を守るためには、研究の目的や意義よりも、その研究が「役に立つ」ことをアピールし、さらに巨額の予算を獲得していくこと自体が、専門家たちの至上命題になってしまったのです。

この頃から生命科学の分野でも、科学と社会、サイエンス・コミュニケーションという言葉が盛んに使われるようになりました。原子力の分野と同じく、現在行なわれている科学がいかにか社会の役に立つかを、わかりやすく伝える活動が重視されるようになったのです。本当に社会にとってこの研究は重要か、今これが最も求められている方向か、暮らしやすい社会づくりを考えた時、ほかの道はないのかという本質を問うことなく、大きな予算を動かしているプロジェクトをさらに膨らませることに努めるのです。

(出典：中村桂子『科学者が人間であること』岩波新書〔2013年〕55頁から60頁、原文縦書き・一部改変。)